

第144号

令和2年3月1日発行
発行所
長崎大学玉園同窓会
〒850-0029
長崎市八百屋町36番地
☎095-824-5494
発行人
濱崎嘉一郎
(株)昭和堂

変り目の時代に生きて

長崎県退職校長会長

上 口 耆 英



日本では、5月から令和元年が始まり、世界各国への周知を経て、11月の伊勢神宮へのご報告をもって、一連の即位礼の行事が無事終了されたことを、多くの国民が、祝意とともに安堵感を覚えたのではないだろうか。

また世界の強豪が、日本に結集して開催された一大スポーツイベントである、ラグビーのワールドカップにおいては、多くの国民が熱狂し、応援した様子が多数報道されていた。ONE FOR ALL、ALL FOR ONEのラグビースピリットの下、ワンチームで果敢に世界の

強豪に挑み続けた日本チームの活躍が、ラグビーを良く知らない多くの国民にも、大きな感動を与えていたようである。

そしてそれだけにとどまらず、ノーサイド後の相手チームに敬意を表する姿に続いて、ピッチを去るにあたっては、整列し観客席に向かって頭を下げ、礼をして感謝の気持ちを表わす日本チームの仕草に倣って、世界各国のチームが日本の文化を取り込んでいた。

きちんと整列して礼をする様子、全世界に向かって発信されていることに、深く感銘を受けたものである。一方では、豪雨の影響で試合が中止になり、決勝トーナメントに進めなかつたチームが、そのまま帰国することなく、豪雨被災地の復旧ボラ

ンティアとして、活動する姿も大きく報道されていた。

正にスポーツの持つ偉大な力を多くの者が感じ、平和であることの大事さを、心に染み込ませることができたのではないだろうか。

他方、世界の情勢を見渡せば、一触即発の国や地域の紛争もさることながら、地球全体の存亡に関わる問題についての枠組みから脱退を表明する大国もあれば、人類の破滅を招きかねない核の取り決めに破棄する国や、兵器を製造する国もあるとの報道が後を断たない。それぞれの国に「言い分がある」ということなのである。様々なメディアの情報を目にし、耳にする中では、指導者が「内向き」であるとか「選挙が近い」からであるとかの文言が多いようである。

要は「自分の国さえ良ければいい」「自分が国民に支持されれば地球が、あるいは他の国がどうなろうと、それは二の次の問題である」との認識しか感じられない。

世界の指導者がこのような有り様であれば、市井の我々の生活の中にも、そのような人物がふえてくるのは仕方がないことなのであるか。

例えば最近の若い人の一つの特性として「仲間との飲み会に参加した加わらうとしない」「自治会等の組織や会合を目にし、耳にするところである。

そんな中で、最近私は前述のこととは全く逆の様相を呈する若者達にお目にかかる機会を得ることができた。それは、同窓会という名称こそついていないものの、地域同窓会的な性格を有する団体の、年に一度の会合の場である。私は何年ぶりかで参加させていただいたが、数年前までは出席者は私より年下は少なく、ほとんどが先輩大先輩と呼ばれる方達ばかりであった。しかし今回は、お酒も飲めない大学1年生を含め、複数の大学から学生が5名、それに新任教諭、今年合格した者、また来年採用試験に再チャレンジする者等8名の若者が、屈託なく明るく爽やかな笑顔で先輩達に接している姿を拝見し、少なからず喜びを感じざるを得なかった。もちろんこれは幹事さん達の多大なるご努力の賜物であることはまちがいないが、若い人達にこの様な行動をする人が少なからず存在し、組織の一員として、大きなパワーとなつての活躍が大いに期待されることを実感した次第である。

ともすれば私達は年とともに、一つの流れとして「今頃の若い者は」という一つの塊で論じたりするのが実態である。

しかし組織や団体を活性化させ維持していくためには、前述のようなパワーを取り込むことがいかに大事であるか、大いに考えさせられた一日であった。

『新学習指導要領の具現化を目指して』 我が校の取り組み

総則の大幅な改訂で、これまでと違った観点で改訂された新学習指導要領の全面実施が近まってきました。

小学校は4月から、中学校は来年4月からということで、各学校では全面実施に向けて取り組みが進んでいるものと考えます。

本同窓会でも、前号の長崎市立小榊小学校・対馬市立鶏知中学校に引き続き、今回は時津東小学校・北諫早中学校にお願いをしました。

「ゆとりと充実」とか「脱ゆとり」とかいわれ、何かと話題をよんできたこれまでの学習指導要領が改訂され、「子ども主体の学び」を重視した、新学習指導要領が平成29年3月31日告示されました。

「生きる力」の育成という目標を、教育課程の編成を通して具現化し、その教育課程に基づいた教育活動を通して、児童・生徒一人ひとりに社会の変化に主体的に関わり、他者と協働しながら未来の創り手となるための必要能力を育んでいくことが求められています。

その目指す資質・能力を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」とし、その具現化の実現を目指すため、学習指導要領の基本的な考えを示す「総則」を中心に抜本的な改定を行っています。

「何ができるようにするか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何が身についたか」「子ども一人ひとりの発達をどう支援するか」「実践するために何が必要か」といった観点にわたって、教育課程や教育活動の改善・充実を図っていくことが求められています。

各学校では、全面実施を見据え、これまでの取り組みを捉え直して、学校の課題を洗い直しその改善・充実を図る取り組みが進んでいるものと考えます。

そこで、本会報でも前号に引き続き、各学校の取り組みの現状を出し合い、他校の取り組みを自校の取り組みと重ね合わせ、研修を深めていただければと考えました。

自ら問いを立て、解決を目指す児童の育成



時津町立時津東小学校長

本多ひとみ

令和2年度、小学校では、新学習指導要領完全実施の年を迎えます。時津町教育委員会の指定を受け、国語科を中心とした研究を進めている本校では、校内研究と学習指導要領完全実施に向けた準備は表裏一体です。

3年間の指定の初年度である本年度は、各学年で研究の方向に沿った授業づくりを行ってきました。そしてこの新しい授業を創り出すことに苦しみながらも児童の成長に手ごたえを感じつつ前進しています。

研究を進めている授業の柱は、「自ら問いを立て、その解決を目指す学習課題の設定」です。この学習課題は次の三つのフレイズで設定します。

- A どんな資質能力を育成するか、という「明確な指導事項」
- B どのように考えればよいか、という「具体的な思考操作」
- C 粘り強く学び浸る「学びがいのある言語活動」

具体例は以下のとおりです。
3年生の「すがたをかえる大豆」を学習材とした授業では、「段落と段落の関係をはつきりさせ、『食べ

物のひみつをしようかいうする放送原こう』を書こう。」という単元を設定しました。

【学習課題】
この単元では、段落と段落の関係をはつきりさせることができるようになる学習をします。
課題は、中心になる言葉や文をくらべて段落のじゅんじよを決め、「食べ物ひみつをしようかいうする放送原こう」をつくることです。

この学習課題の設定により、今までは教師だけが知っていた授業で育成されるべき能力は、同時に児童の目標となります。そして学習課題に向かう道筋も共有することができるのです。

さらに、学習課題に向かって、児童一人一人が「自分の問い」を立て、解決を目指して学習を進めていきます。

9月に行った6年生の研究授業では、「筆者の表現の工夫をとらえ、『鳥獣戯画を読む』を読む！」という単元を設定し、「問いの立て方」について研究を深めました。11月に行われた前述の3年生の研究授業では、「問いの解決方法」を中心に協議を

行いました。研究授業を通して、学校全体で目標とする授業に近づきつつも、そこに新たな疑問が生まれ、またみんなで頭を悩ませるということを繰り返しています。

次回行われる2年生の研究授業で、この疑問の解決に迫る予定です。

さて、本校が研究しているこの学習方法では、授業の初めに学習計画を児童と共有するのですが、その学習計画の最後には、「力をたしかめる(試験)」と書かれています。3年生の学習計画には、「※せつめいの中心になる言葉や文をとらえ、段落のじゆんじよを考えるしけん」と付け加えてありました。この「しけん」は当然市販テストで代用することはできません。教師自らが自作することになります。この授業者も自作した試験を実施し、一人一人の解答を見ながら、授業を通して児童が身に付けた能力を確認していました。普段「学び」から逃げている児童が、求める能力をしっかりと身に付けており、研究の方向性に手ごたえを感じていました。

4月から完全実施となる学習指導要領においては、「公正に個別最適化された学び」を実現する多様な学習の機会と場の提供が求められています。明確な学習課題を児童と共有し、児童一人一人が自ら問いを立て、その解決に向かう。個別の学びを全体の学びへ深めていく。新学習指導要領の理念を実現する授業を、全職員で目指していきたいと思えます。

教育のユニバーサルデザインを切り口として



諫早市立諫早中学校長

江口 武

知識基盤社会の進展やグローバル化が進む今日、急激な情報化や技術革新が大きな社会変化を生み出し、先を見通すことが困難な時代となっている。このような時代に子どもたちに必要なことは、「予測できない社会の変化に受け身で対応するのはなく、主体的に向き合って関わり合い、一人一人が自らの可能性を最大限発揮し、よりよい社会と幸福な人生を自ら作り出していくこと」である。このような背景の下、平成29年3月31日、新しい学習指導要領が告示され、学習内容と方法の両方を重視し、子どもの学びの過程を質的に高めていくこと、具体的には、単元や題材のまとまりの中で、子どもたちが「何ができるようにするか」を明確にしながら、「何を学ぶか」という学習内容と、「どのように学ぶか」という学びの過程を組み立てていくことが重要になることが示された。

そこで、特別な支援や教育的配慮を要する生徒が多数在籍している本校では、特別支援教育を根底に据えた生徒指導及び学力向上対策の充実が不可欠であり、学習面においては、学力の二極化が顕著であることや学習規律が定着していないことなどが課題として挙げられることから、校内研究における研究テーマを「生き生きと学びに向かう生徒の育成(ユニバーサルデザインに基づいた教育支援を通して)」と設定して研究と実践を進めることとした。教育のユニバーサルデザインを具現化するために、以下の三つを柱として取り組んでおり、主なものを紹介する。

一 **授業のユニバーサルデザイン化**

生徒を引き付けるための視聴覚教材を工夫し、支援の在り方を検討しながら、「わかった」「できた」を実感させる授業を構築する。共通実践項目として、①「めあて(課題)」「まとめ」を提示すること、②「書く」活動を重視すること、その方策の一つとして、週1回朝自習で視写活動に取り組みせること、③授業の中で「学習規律」を徹底するとともに、

授業の見通しを持たせるために本時の授業の流れを提示することなどの共通理解を図った。また、全職員が必ず他の職員の授業を参観する週間を設け、「授業のユニバーサルデザインチェックシート」の記録を蓄積し授業改善の資料として活用していくこととした。

二 **教室環境のユニバーサルデザイン化**

「教室前面の貼紙等の全面撤去」や「教室ロッカー内の整理整頓の仕方」の例示」といった学習活動に集中できる環境を校内統一して作り、「返事・声量・聴く」といった基本ルールを生徒に提示して意識化を図った。

三 **人的環境のユニバーサルデザイン化**

学級の雰囲気や軟らかくし、生徒が安心して学校生活を送ったり授業に臨むことができる人間関係を構築し、生徒が自己有用感を感じられるようにする。そのため、毎学期アセスの実施・分析を行い、生徒の学級内における人的環境を把握し学級経営に生かしていくこととした。また、教育支援計画、指導計画を作成し、特別な支援や教育的配慮を要する生徒についての理解を深めた。

本研究と実践はその緒にいたばかりであるが、今後も取り組みを継続し、生き生きと学びに向かう生徒の育成を目指していきたい。

わたしの教育実践

助演男優賞



大村市立旭が丘小学校 山口 歩

「教師は役者だよ、役者。役にないからんばね。」

修学旅行の夜、同学年をさせていただいている先生から聞かせていただいた言葉です。その言葉を聞いて以来、学校生活においては、主役は子供たちで、教師は主役を引き立たせる助演をするというのではないかと考えるようになりました。現在は毎日の学習指導、学級経営を行う中で、「どうやって子供たちを主役として引き立たせるか」ということを常に考えています。

どの教科においても、子供たちが主体的に問題を解決し、「自分でできた」と実感できるように、教師がここぞという場面で役割を果たすことを意識しているところです。

学級経営においては、「一人一人の子供が主役となり、失敗を恐れず挑戦できる雰囲気づくり」に力を入れていきます。そのために子供たちと「よかさ(いいじゃん)」という言葉を使い、友だちが失敗したり間違えたりした時にでも、互いを認め寛容さが身につけてきたように思います。

ある研修会で、「学級経営と学習指導は両輪をなしており、どちらかだけに力を入れればよいというものではない」と教えていただいたことがあります。自分自身未熟な点ばかりで周囲の先生方や、子供たちに迷惑をかけてしまうこともあります。子供たちが主役となり、楽しい学校生活を送ることができるよう、私は助演男優賞を目指していききたいと思っています。

自信と安心感のある授業を



波佐見町立中央小学校 大谷 健一

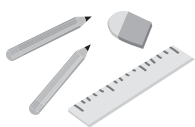
教師になって1年半が経ちました。去年は目の前の仕事をするのに一杯の1年間でしたが、現在は仕事にも少しづつ慣れ、目標を立てながら日々子どもたちの指導を行っていています。

そんな中、今年の11月に外国語の研究授業を行う機会をいただきました。私は、授業作りを行う中で、特に二つのことを意識して取り組みました。

一つ目は、子どもが自信を持つことができる指導です。学級のほとんどの子どもたちは英語が好きでしたが、間違えることを恐れて積極的ではありませんでした。そのため、単元の最後の時間に子どもたちが自信を持ってやり取りができるように活動を設定しました。同じ表現を、活動を変えながら繰り返し練習させることで、自信をつけさせました。初めは小さかった子どもたちの声もだんだん大きくなり、楽しんで活動できる子が増えていきました。

もう一つは、授業中の雰囲気作り

です。間違えることは恥ずかしいことではないという安心感を持てる雰囲気を作るために、自ら英語を積極的に使ったり、ALTに質問したりしてみんなと共有しました。担任自ら失敗を恐れず、英語を話そうとし、子どもたちの学びのモデルになれるよう努めました。2か月ほど続けると、子どもたちからもわからない単語の質問が出るようになってきました。また、間違っても良いという安心感を持って挑戦してみようという積極性も育ってきたように思います。研究授業当日も子どもたちはとても頑張り、その後の授業においてもその姿勢を忘れていません。



一期一会



長崎市立東長崎中学校 井手 淑子

これまでを振り返って最も強く思うのは、自分が「出会い」によって育てていただいたということ。講師の時から、たくさん生徒や先生と出会い、多くを学ばせていただきました。その中でも、自分を大きく変えるきっかけになったのは、宇久島での出会いです。

佐世保市立宇久中学校に赴任したのは教員4年目の年。島で唯一の美術科教師となった私は、消極的で自信がなく、不安でいっぱいでした。しかし、偶然のきっかけから島民と一緒に宇久島アートフェスティバルを立ち上げ、転勤するまでの3年間、島興しとして続けました。学校との二足のわらじは容易なものではありませんでしたが、その中で得た学びは想像以上に多く、私を大きく成長させてくれました。私の想いを理解してくださる方も徐々に増え、島民との温かい絆もできました。地域と

手を取り合い教育を行う重要性に気付いたのはこの頃です。美術科としても、様々なことに挑戦しました。毎年、招待作家に生徒対象のワークショップをしていただき、3年目には長崎大学の学生と宇久小・神浦小と連携した小中大のワークショップを実現しました。次に赴任した県教育センターでも、宇久中学校で授業実践をさせていただきました。また、宇久島アートフェスティバルの実践をまとめた論文は、佐武賞の佳作をいただきました。さらに、宇久島ア

トが縁で、デンマークのアートイベントに参加するなど、出会いが次の出会いに繋がっていききました。私がここまで思いきり活動できたのは、職場の先生方や宇久島の方々、関わる全ての方の御理解と温かい御支援があったからに他なりません。そして、打てば素直に響き、私にたくさん学びを与えてくれた生徒の皆さん。心から感謝しています。今後、これから感謝して、そしてこれからの出会いに感謝し、着実に成長していただける教師でありたいと思います。

私が日々心がけていることは、「一人ひとりを大切にすること」です。現在勤務している学校では、特別支援教育の研究をしています。学校生活における生徒の心配事や不安を少しでも減らしたいという思いで始まったのですが、生徒一人ひとりに寄り添う支援とはどういうことなのか考えさせられることが多々ありました。

一人ひとりを大切に



五島市立崎山中学校 吉武 未来

例えば、「説明したことを理解するのに時間がかかる。指示を的確に聞き取れない。ノートを取るのに時間がかかる。」など、授業中に困ることは一人ひとり違います。また、学校生活の中での悩みもそれぞれ違います。忘れ物が多いこと、友人とうまく関係を築けないこと、部活動でのこと、この一つ一つに気づくことが支援の第一歩だと思います。そして、困っている生徒に気づくために、私は日頃からできるだけ多

く生徒と関わりを持つようにしています。学習面では、毎日の課題を丁寧に見てアドバイスすることや、授業中に気になることがあればその都度声をかけて解決することを心がけています。また、休み時間や給食の時間などに一人でも多くの生徒と話をコミュニケーションをとっています。

これらのことは、当たり前のことばかりで特別なことは何一つありません。しかし、当たり前を積み重ねることです。ちょっとした生徒の変化にも気づき、どのような支援ができるか考えて実践することができるようになりました。

生徒全員が楽しい学校生活を送ってくれることは何よりも嬉しいことです。そのために、生徒の変化にすぐ気づき、声をかけて助けることができる教師でありたいと思います。私は、今後も、「一人ひとりを大切に」するという意識を持って関わっていききたいと思います。



あの人、今……

終の棲家の地で

西彼杵郡長与町

磯田 隆司

(昭和43年3月卒)



教職を退いてからまもなく14年が経過する。退職後10年間ほどは、市役所での嘱託や関係団体の一員として事務的な仕事に携わってきたが、72歳を迎えたところで務めとしての仕事全てから退いた。

ちようどこの年、自治会の「班長」当番が回ってきた。現職中は、全て妻任せでやり過ぎしてきた自治会関係や様々な地域との関わり。「今年はあるあなたが頑張ってくださいね」の一言で、これまでの妻任せの付けが私に回ってきた。自治会関係では、1年間月1回の班長会議への出席、会費の集金、資料回覧や配布の業務、

それから年数回の行事や活動（夏祭り・鬼火焚き等々の世話）への参加。自分は、これまで如何に居住地域での関わり方が希薄だったかということに気づかされる1年間でもあった。輪番制による役回りだったことは言え「班長」の業務に携わったお陰で、役員をはじめ何人もの方々と知り合いになり挨拶はもとより酒を酌み交わす間柄になるなど、自治会の活動内容に触れたこと以外にたくさん得るものがあつた。

考えてみれば、地域との交わりも薄く、長年勝手気ままに家庭を殆ど顧みなかった私。せめてこれからは機会を得ては地域と繋がりつつ、家庭では粗大ごみ扱いをされる前に、妻にかける世話を減らす努力が第一番か。加えて、できるか否かはともかくとして、思っただけは、『戦戦慄慄に一日を慎め』（日々慎み深い生活に心がけよ）の故事に習いつつ、『家内睦まじきは富貴の基』（家族が仲良く暮らすことが幸せや福を招く基）を妻との合言葉にして、恙無きことを願いつつ過ごすことが最も肝要なことではなかるうかと思いを巡らす今日この頃である。

出会いに感謝、そして新たな出会いを

島原市北安徳町

田中 益良

(昭和51年3月卒)



昨年、念願の五島旅行。40年前の不安な気持ちとは違って、感謝の気持ちをもつて富江小学校を訪れた。校舎の前に立つと子供たちとの思い出が蘇ってきた。

「学級でいじめがあつていたので話し合いの時間をください」と申し出て、率先して問題を解決してくれたあの子は、今ごろどうしているだろうか。また、あの子は、あの子は……。
子供同士が深く関わり合い、個性を発揮してくれたことは、授業に自信を持たなかった自分にとっては大きな救いとなった。また、保護者から子育てについて輪番で書いてもらった日誌は、教師を続ける上で大きな励みとなった。

振り返ってみると、初任校は特別活動の研究校で、3年間学び、その理念や目標である「望ましい集団活動」「個性の伸長」「自主性」などは、自分の教育観に大きな影響を与え、それを学級経営の柱として富江小学校で実践できたように思う。
定年退職後、子供と間近で接する授業を4年余り勤めたが、改めて教師という仕事の魅力を感じて教職生活を終えることができた。これもひとえに五島での子供や保護者との出会いのおかげである。

近ごろ、大学の近くに行った時は、キャンパスを散策したり、大学前のレストラン（自分の学生時代オープン）のマスターと話をしたりして、青春時代をプレイバックすることも楽しみの一つである。

これまで転勤で、地元の仲間や地域の人と疎遠になったところがあつたので、これからは仲間との交流を深め、地域の行事にも積極的に参加しようと思つている。

また、ボランティア活動やサークル活動を通して、新たな人との出会いがあることを期待している。さて、今年はどこを訪れようか、そして、どんな再会があるのか……楽しみだ。

昭和〜平成〜令和

福岡市東区 田中 寛
(昭和55年3月卒)



長大を昭和55年に卒業し、福岡市で教職に就き無事に定年まで勤務することができました。

退職後の3年は嘱託勤務。令和元年・本年度は、まだ私にも教育界に貢献できることはないかという思いで初任者指導教員として6名の新採教員の指導にあたっています。

指導者として私自身、何から始めてよいものか迷いつつ1学期は、週1回指導案を書かせ授業研究を行います。はじめは、チョークの使い方から、線の引き方、発問・板書の仕方と基本となる指導が続きます。指導案に基づく授業研究については、

今はネットを探せばユーチューブを始めありとあらゆるものを瞬時に探すことができます。

私が、新任時代とは雲泥の差、パソコンもなければ指導案自体が手書きの時代です。書き直すとなると最初からやり直しそんな経験をたくさんしてきました。少しやるせなさを感じてしまいます。

また、新任の授業内容も多岐にわたる授業が展開されます。私が経験した学習指導では通用しないことも多くあります。私自身、教材研究を今までの中で一番しているのではないかと思います。

結構しんどいこともあります。子どもたちの純粋な気持ちや笑顔を見ると最高の気分になるし、この仕事はやはり最高の仕事だと思います。そして、新任教師が日々子どもとともに成長していく姿を見ると感慨深いものがあり、少しでも教育界の人材育成に貢献しているかと自画自賛している今日この頃です。

教師をめざして

長崎大学教育学部4年 松田 彩葉

長崎大学教育学部4年 山岡 大地

私は周りの目を気にし、自分の思いを表に出せない子どもでした。そんな私に、変わるきっかけを与えてくれた恩師がいます。

野外炊飯でのこと。薪とマッチ3本のみで火をつける、小5にとつて難題が与えられました。1本目、火は着きません。グループ内に緊張が走り、自然と様々な意見が飛び交います。その雰囲気からか、いつの間にか私も輪の中に入り意見を出していました。全員で考えた甲斐もあり、2本目で着火。全員で喜び合ったことを今でも覚えています。プログラムひとつからこだわり、子どもに何かきっかけを与えてくれる先生でした。これを機に少しずつ自分の意見を出せるようになり、中学校では生徒会役員として、部活動ではキャプテンとしてみんなをまとめることができるようになるまで成長することができました。

私も恩師のような存在になりたいです。日頃から生徒と向き合い、行動できる教師を目指します。不安もあります。先輩方から学び、目標とする教師の姿に近づけるよう努力し続けます。

「おっ、受かったー」
合格通知を受け取った私は、ほっと胸をなで下ろした。振り返ってみると、教育実習が終わってから約1年間、この日を目指して毎日突っ走って来たように思える。自分一人ではここまで来れなかっただろう。教師を目指す高い志を持った仲間や、大学や玉園同窓会の先生方のサポートがとても大きな支えであったことを改めて知った。

「やっと始まるんだ」
しばらくしてから、ようやく教員の道へのスタートラインに立てた実感がひしひしと湧いてきたのである。合格後に実習に行く機会があった。子どもとの関わり方や先生方の動き方を今まで以上に気にするようになった。指導の仕方やまとめ方などまだ知らないことが多く不安を覚える一方で、子どもたちから笑顔をもたれたときほど嬉しい瞬間はなく、教師生活への期待で胸がいっぱいなる。

揺らぐ気持ちの中で、私はどんな教師を目指していくのか？揺らがないう軸を持ち続けていきたい。

母校だより

目録

近況便り

長崎大学教育学部長 松元 浩一



早かった冬の夕暮れから早春の夕暮れへ。教育学部同窓の皆様、いかがお過ごしでしょうか。これまで三号続けて教職大学院を案内してまいりましたが、今号は教育学部の近況をご報告いたします。

文部科学省は、平成二十九年八月に「国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議報告書」を公表し、以来教員養成の高度化の指針と位置づけております。その

記述内容を踏まえ、同年より全国の国立教員養成大学・学部等から先進的な取組みや特色ある好事例を選りすぐって同省ホームページに掲載しております。皆様の母校である本学部は二年連続して、三十年代はインクルーシブ教育の、令和元年度は離島・へき地教育の取組みが先進的な好事例として採用されました。前者は、附属学校園及び長崎県教育センターと協働して同校園の外に通級指導教室（教育学部支援ラボ）を設置してインクルーシブ教育の支援に取り組んでいるものです。後者は、離島・へき地地区の更なる教育の充実を目指して本学部小学校教育コースに「離島教育プログラム」を開設し、独自の推薦枠を設けて入学試験を行っているものです。後者の取組みは、令和元年度に導入された長崎県教員採用試験の離島教育特別枠と相まって、今後の教員の養成と採用が有機的に機能することが期待されております。

次は、教育学部の学生組織の改編についてお知らせいたします。本学部は現在、一課程(学校教育教員養成課程)四コース(小学校教育コース、中学校教育コース、特別支援教育コース、幼稚園教育コース)から構成されております。この構成に変更はありませんが、令和二年度入学生より、コースの内部構成が再編成されます。小学校教育コースは、子ども理解実践、教科授業実践、ICT活用実践、多文化理解実践の四専攻から、子ども理解、教科授業開発、離島・地域文化の三つの系に、中学校教育コースは、国語から英語に及ぶ十専攻が、文系、理系、実技系の三つの系に、幼稚園教育コースは、名称を幼児教育コースと改め、こども保育専攻と芸術的感性開発専攻を解消して改編されます。特別支援教育コースは現行どおりです。また入学定員は、二四〇名を一八〇名とし、小学校教育コース一〇〇名、中学校教育コース五〇名、幼児教育コース十五名になります。特別支援教育コースは現行と同じく十五名のままです。詳細は誌幅の都合上次のURLに譲ります

(<https://www.edunagasaki-u.ac.jp/prospective/>)。

人事のご報告をいたします。たいへん遅くなりましたが、平成三十一年四

月一日に七名の先生方がご着任になりましたのでご紹介いたします。人間発達講座に長谷川哲朗教授、野中光治教授、林田純雄准教授、野崎晃由准教授、安井暁子准教授、榎景子准教授、初等教育講座に新谷和幸准教授です。今後のご活躍、ご健筆を祈念申し上げます。一方、本年度をもって梶本ひろし教授(幾何学)、佐々野好継教授(住居学)、呉屋博教授(教科教育学)が定年退職をお迎えになります。永年にわたるご尽力に深く感謝申し上げます、心よりご健勝をお祈り申し上げます。

最後に、この場をお借りして玉園同窓会佐世保南地区懇話会の皆様に御礼を申し上げます。十二月十四日に懇話会に出席し、教育学部・教職大学院の取組みをご紹介いたしました。お世話下されました小林庸輔同窓会地区長様、平元隆久福石中学校長様、蒲川法子天神小学校長様を始め、諸先生方に深く感謝申し上げます。

長崎大学教育学部、大学院教育学研究科(教職大学院)、附属学校園は一体となって、変わらず、長崎県教育に貢献いたす所存です。教育学部同窓会一人おひとりの御多幸と御活躍を深く念じております。

動いています同窓会

地区懇話会

佐世保南部地区の概要

事務局長 野中 元則

本会の開催は、今年度で17回目を迎えました。

今年も佐世保地区の要望により昨年に引き続き、長崎大学教育学部長の松元浩一先生を講師としてお招きし、開催いたしました。

日時 令和元年12月14日(土)

場所 佐世保ワシントンホテル
参加者 学部長1名 現職会員18名
理事他4名 計23名

懇話会 初めに佐世保地区長の小林庸輔先生から開会のあいさつがありました。

次に、教育学部長の松元浩一先生からあいさつがあり、その後引き続き「教員養成の現状・課題・これから」と題して、講話がありました。わかり易く図形化(カラー)した資料をもとに、昨年度の卒業生の進路状況・過去の教員就職率の推移・令和元年度の受験結果、また、教員養成課程の現状、更には、教員養成大学として改革に関する取り組みの状況等について詳しく説明があり、長崎大学教育学部が丸となって取り組んでいる現状と課題を知ることができました。

私共、玉園同窓会の一員としてあらためて大学との関わりをいかに持

ち、協力していけるか課題もあるように思いました。

懇親会 退職会員、現職会員が共に学生時代に戻り、思い出話に盛り上がり、笑顔の交流がみられました。玉園同窓会員として、お互いの絆を深めるひとときとなったように思います。



決意を新たに

佐世保市立潮見小学校教頭 濱村 弘美

私が平成元年に採用されてからこの30年間に教育現場は、目まぐるしく変わってきました。来年度からの新学習指導要領の全面実施に向け、勤務校でも準備を急ピッチで進めているところです。

また長崎県でも、教員の世代交代

が大きな課題であり、様々な改革を迫られています。

長崎大学はもつとダイレクトに改革を進められるなど、時代のニーズに合わせて対応されているのだということを実感しました。

どの職種もそうだと思いますが、教職は大学で学んできただけでは、実際の仕事に対応はできません。仕事をしながら実践力を磨いていくことが大切です。自分たちが先輩たちに育てられたように、今度は育てていく側になったのだということを感じました。

懇親会では、先輩たちと親しくお話をすることができました。地域の方として、見知っていた方々が玉園同窓会の先輩だということが分かった、さらに打ち解けて話すことができました。「学校は、幸せになるために行くところ」「当たり前前のことがありがたい。」「あ」のつく言葉を大切に」本当にそうだ！思わずメモを取りました。

教員志望者が少なくなっている今、私たちが魅力ある姿を見せられるかどうか勝負だと感じます。教師ほどやりがいがあり、自分も成長できる素敵な仕事はないと思います。今長崎大学で学んでいる教え子がいま、学生生活に全力で生き生きと取り組んでいる姿を見ると、未来に希望を感じます。後輩たちに恥じない憧れられる先生でありたい。あせらず・あきらめず・愛情いっぱい頑張るぞ。決意を新たにできる機会となりました。

ホームカミングデー

2019

10回目を迎えた「ホームカミングデー」が、11月2日(土)、文教キャンパスで実施されました。

今年度は、これまでとは違い、「校友会」主催により行われ、内容も新たに発表しました。

当日は、学園祭も実施され、学生・卒業生・教職員、そして一般のお客さんで賑わう中での交流を深めるホームカミングデーとなりました。

「校友会賞表彰」「西遊基金高額寄付者への感謝状贈呈」「学生のアカペラサークルによる演技発表」、そして、座談会「校友会賞受賞者で、まんが「第九の波濤」(講談社)の作者で、しかも水産学部卒業生である草場道輝氏と、その同級生である、水産学部教授の高谷智裕氏に対して、教育学部卒業生である市原隆靖氏がインタビュースるといった内容で、盛り上がりを見せました。

楽しみの交流会では、全学部の卒業生や教職員が一堂に会して、青春時代の思い出話に華を咲かせながら交流を深めていました。



公益目的事業の募集

長崎大学同窓会は、一般社団法人として長崎県内をはじめとする教育振興に寄与することを目的としての活動を行っています。

この目的を達成するための事業として、長崎県内の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校に対する図書購入の助成、及び長崎県内の児童・青少年育成を目的とする事業への助成を行っています。令和2年度も下記の要領で募集を行いますので、周知のうえで応募ください。

図書購入費助成事業

- 1 助成校 小学校・中学校・高等学校・特別支援学校
- 2 助成額 1校につき10万円未満
- 3 募集期間 令和2年3月1日～6月30日
- 4 応募手続き
 - ① 応募希望の学校は、電話(095-824-5494)で、長崎大学玉園同窓会へ連絡する。
 - ② 応募した学校へ「募集要項」を送付する。
 - ③ 学校は、「申込書」に、「購入図書計画書」を添えて提出する。
 - ④ 選考委員会による選考後、「決定通知」を応募した学校に通知する。



(諫早市立上山小学校)

児童・青少年健全育成事業

- 1 助成の対象となる事業
 - ① 児童及び青少年が参加して行う体験活動・発表会・展示会・伝統文化の継承・社会貢献などの実践活動
 - ② 健全育成を目的として実施する、保護者・地域の指導者等の研修、学習活動
- 2 助成額 1件当たり5万円を上限として、総額20万円の範囲内で、対象とする事業の必要経費の概ね2分の1を限度とする。
- 3 募集期間 令和2年4月1日～6月30日
- 4 応募手続き
 - ① 応募希望の団体は、電話(095-824-5494)で、長崎大学玉園同窓会へ連絡する。
 - ② 応募した団体へ「募集要項」を送付する。
 - ③ 希望する団体は、「申込書」に「実施計画書」を添えて提出する。
 - ④ 選考委員会による選考後、「決定通知」を応募した団体に通知する。
 - ⑤ 助成を受けた団体は、事業実施後、「実施報告書」を提出する。

ホームページを開設しました

本同窓会は、一般社団法人として、その活動状況や公益目的事業について、会員の理解をはかることはもとより、それ以外のより多くの人々に知っていただくことが必要になってまいりました。そこでホームページを開設いたしました。

今後の本同窓会の運営にあたって、大いに活かし新たな同窓会活動をめざしてまいりたいと思いますので皆様の御活用をお願いいたします。

ホームページアドレス

<https://www.edu.nagasaki-u.ac.jp/ja/tamazono/>
メールアドレス nu-tamazono@mxb.cncm.ne.jp

一事一務一局より

「終身会員」への入会願

今年3月、御勇退される同窓会員の皆様、永きにわたる長崎県教育界への御尽力、本当に御苦労様でした。本同窓会では、退職後も終身会員として、本会の進展に寄与していただけたらと願っています。

是非、入会のほどよろしくお願

いたします。

(1) 入会金 5,000円(終身に

わたって、会報を送付します)

(2) 振込用紙は、事務局へ連絡して

ください。すぐお届けいたします。